差別から学び、差別をなくす一歩に

「同和地区らしいよ」

小学5年生の時のことです。学校で同和問題の人権学習がありました。**同和問題は、特定の地域の出身であることなどを理由に、さまざまな場面で不当な差別を受けるという、日本固有の人権問題です。**

授業が終わり、周りのクラスメイトと話していた私は、地域の具体名を出して「この辺りだと○○が同和地区らしいよ。」と発言しました。それは、以前に親から聞いたことがあったからです。「そうなんだ。」「よく知っているね。」などと私の発言に反応するクラスメイトがいた傍らで、一人だけ何も言わずに悲しそうな表情をしている子がいました。しかし、その時の私は、その表情のわけが分からないままでした。

同和問題との出会い直し

中学校でも高校でも同和問題の人権学習はありました。しかし、同和問題に対する関心は、私のなかで次第にうすれていきました。

そんな私を変えてくれるきっかけとなったのは、社会人になって参加したある学習会でした。その学習会では同和地区出身の女性Aさんが、自分が過去に受けた結婚差別の体験について、地域の中学生たちに話していました。

> 大人になった私に好きな人ができました。その人とどうしても結婚したくて、ある時、自分が同和地区の出身であることを打ち明けました。もしかしたら交際がダメになるかも知れないと不安でしたが、その人は私という個人を受け入れてくれました。
>
> けれど、相手の親は私たちの結婚に賛成してくれませんでした。私たちは反対を押し切って結婚するほかありませんでした。
>
> 子どもが生まれて10数年が経った今でも、相手の親との交流はありません。私たちは今でも、かわいい孫をしっかり抱いてほしいと思っていますが、差別のせいで、それは未だに実現していないのです。
>
> このように、差別は時に親子の関係を断ち切ることもあります。皆さんも差別の現実から目を背けずに、一緒になって差別のない社会をつくっていきましょう。

Aさんは仕事上でよく会う方でした。明るく朗らかな普段の人となりを知っていただけに、涙を流し語る姿を見るのは、たいへんショックでした。

「こんな差別がいつまでもあってはいけない。」

Aさんの話を聞いて強くそう思った私は、同和問題のことをもっと知るために、講演会や研修会に積極的に参加しました。また、識字学級や地域行事などを通じて同和地区に住む人たちとの交流も深めていきました。その過程で思い出したことがあります。それは小学5年生の時の私のあの発言のことです。

過去の自分を振り返って

当時を振り返ると、私自身のあの発言の根底には、「自分が住む地域は同和地区でないからよかった。」という安ど感や優越感が、私の周囲も含め存在していたのだと思います。そうした感覚こそが、同和地区を避けようという意識や偏見につながり、差別の問題を他人事へと遠ざけてしまう結果になったと思います。

悲しそうな表情をしていたあのクラスメイトとは、卒業してから一度も会っていません。けれど、私の差別的な発言によって、あの場で語ることをためらわせたかも知れないことを、私は心の底からあの子に謝りたいと思っています。

差別のない社会をめざして

「差別は人間が作り出したものだから、人間の力でなくしていける」という言葉があります。

確かに、私たちは差別する側になる可能性をもっています。しかし同時に、人権に関する学びや当事者との出会いなどを通して、差別をしない人間に変わっていくこともできます。

私はこれからも学び続けていこうと考えています。そして、いつか会えるかも知れないクラスメイトに、胸をはり、瞳を輝かせて差別のない社会づくりの一員として活動する私の姿を見てもらいたいと思います。

